

映画が面白かった 第二段
(洋画の邦題を考えてみる)

高校時代から映画が好きで色々見歩いたが、近頃はテレビの名画劇場で楽しむ方が多くなってきた。懐かしい映画に出会うことがあると、もう二度と見ることはできないかも・・・と思ってVHSに録画して保存してきた。しかし、10年20年と経つうちにカビが生えたり劣化したりで止むなく処分することにしたのが数年前のこと。映画250本分はあっただろうか。

そして、地上波デジタル移行を機に導入したHDD付きのブルーレイレコーダーで再び始まった名画劇場の録画と鑑賞と保存。興味があるものは録画して、時間がある時に鑑賞、そして「残す価値ありと判断したものはブルーレイディスクに保存（再び見る価値があると判断したものに限る）」。

何度も見たが面白い映画、初めて見た映画だが面白いと思った映画に絞って録画保存することにしたが、いつの間にかディスクの枚数は80枚余・映画240本分を越えてしまった。

平成17年12月に書いた「映画が面白かった」の続編として、映画を見た中で気がついたことを再び書いて見ることにした。

「[ものすごくうるさくて、ありえないほど近い](#)」という長いタイトルの映画を見た。9.11の事件で父親を亡くしたアスペルガー症候群の少年が、父の遺品である「鍵」が持つ秘密を調べようと探検活動をする話。何とも長ったらしいテレビのサスペンスドラマの副題のようなタイトルを見て興味を持ったのがきっかけだった。この映画の原題は「Extremely loud & incredibly close」、確かに解りやすく直訳すればこれで悪くない。洋画の邦題は映画配給会社が付けるようだが、本来のタイトルの意味からは遠くかけ離れた意味になっていることが少なくない。妙にいじりすぎて本来の意味から遠く離れて「商業イメージだけが先行している」ことさえある。

「[OK牧場の決闘](#) (Gunfight at the OK corral)」の最終シーンはワイアット・アープ兄弟とドク・ホリデイがOK牧場でクラントン一家と集団銃撃戦を繰り広げる。「決闘」と名が付くとどうしても「一対一の対決」を想像してしまうが、この映画の場合は集団銃撃戦でまさに原題のとおり「Gunfight」である。この映画の邦題は「OK牧場の対決」とした方が原題に近いイメージになったのではないかと思う。

その昔「真昼の決闘」「ゴーストタウンの決闘」など決闘映画がもてはやされた時代があった。

ゲイリー・クーパーとグレイス・ケリーが出演する「[真昼の決闘](#) (High noon)」は、一人の保安官が四人の悪党を相手に決闘をするシーンで終わる。この時刻が正午であるところから原題が付き、邦題は「真昼」だけでは物足りないとして「真昼の決闘」となったようである。バックに流れる主題歌

「Do not forsake me oh, my darling・・・」は、「私を見捨てないで、あなた！！・・・」

「[ゴーストタウンの決闘](#) (Law and Jake Wade)」はロバート・テイラーとリチャード・ウィドマークが出演する男っぽい西部劇。保安官ジェイク・ウェイド（実は昔は悪党だった）と昔の仲間との戦利品を巡る争いで、最後は一対一の決闘になる。映画の中身がわかれば原題の持つ意味がわかってくるが、これを忠実に訳してしまうと邦題としては解りにくいものになってしまうからなのだろうか。「法と過去との板挟み（一保安官の悩み）」ではどこかの国の法務大臣の自叙伝になってしまうかも・・・。

ロビン・ウィリアムズが妻と離婚して子育てに苦悩するあまり、女装したシッターになってしまう滑稽ながら涙を誘うような「[ミセス・ダウト](#)」という映画があった。主人公の名前 (Mrs. Doubtfire) が原題になっているが、邦題では日本人が知っている単語「Doubt」だけを意識したのだろうか「ミセス・ダウト」となっており、なんと日本語字幕でも主人公の名は「ダウトさん」と出て来る。ダウトファイアさんではなぜいけなかったのか、あえてネタばれするようなタイトルを選んだのはなぜか、疑問が残る。

若き日のトム・クルーズが軍隊の司法官として登場する「[ア・フュー・グッドメン](#)」、航空会社の開発技術者のジョディ・フォスターが空港で娘をさらわれ、飛行中に様々な事件に巻き込まれて行くスリリングな映

画「[フライトプラン](#)」、ホイトニー・ヒューストンが歌手として登場する「[ボディガード](#)」などは、原題をカタカナで表記しただけの邦題になっている。この種の邦題は「殆どの日本人が知っている単語」であれば問題はないが、あまり一般的でない言葉だと問題がある。ロバート・レッドフォードが監督をしてブラッド・ピットが主演した「[リバー・ランズ・スルー・イット](#)」は日本人にもわかる英語の題名で親しみやすかったが、殆どの映画関係者が日本語で（今風の平坦な抑揚で一息で言う：文字では表現できないのが残念だが）「りばあらんずするういっと」と言っていたのには呆れた。

ポール・ニューマンが主演する「[左ききの拳銃](#) (The lefthanded gun)」、豪華キャストで大金をつぎ込んで作った「[ナバロンの要塞](#) (Guns of Navaron)」、ジェームズ・ディーンが主演したたった三本の映画のひとつ「[理由なき反抗](#) (Rebel without a cause)」などは原題に忠実な邦題でわかりやすいタイトルだった。アルフレッド・ヒッチコックの映画は、原題の意味を忠実に守った邦題になっているものが多い。「[鳥](#) (The birds)」、「[北北西に進路をとれ](#) (North by northwest)」、「[知りすぎている男](#) (The man who knew too much)」。チャールズ・チャップリンの映画は「[街の灯](#) (City lights)」、「[独裁者](#) (Great dictator)」は直訳、「[キッド](#) (The kid)」、「[モダンタイムス](#) (Modern times)」はそのままカタカナの邦題となっており、「[黄金狂時代](#) (The gold rush)」はその時代には日本人にゴールドラッシュという言葉が浸透していなかったことによるものか、それとも苦心して作られた邦題なのか。「[殺人狂時代](#)」だけが原題から遠く離れた邦題になっている。原題は結婚・詐欺・殺人を繰り返す主人公アンリ・ヴェルドゥの名前で「Monsieur Verdoux」。

海外の映画の題名は邦題をつける時に「商売になる映画」にするために「人の関心をひきつけるタイトル」にすることが少なくないようである。題名に魅かれて見にったら期待外れの映画だったこともあったり、またその逆であったりもする。

日本の映画も海外で放映される時には Suki-yaki, Bushido, Samurai などの目を引くキーワードが利用されていたことがあるので、同じことかもしれない。

洋画を見る前に、必ず原題を見てそれを辞書で調べて訳してみることにしている。そうすることで、商業主義の影響を排除して「映画製作者がこの映画を通して何を言わんとしているか」がわかることが多いので、この作業は省けないと思うようになった。



以上